

# The Gallery voice

NO-41

編集・発行／画廊沖縄〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 TEL / FAX(098) 888-6117 / 2010.3.2  
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa JAPAN www.galleryokinawa.com

## ＝新世代の陶作家展＝

### ～おしゃべりな土～

#### 前田 彩

当時18歳だった私は毎日をもんもんとした思いで過ごしていました。その時、私はトリマー（犬・猫理容師）の専門学校に通っており、日に日に学校へと向かう足どりは重くなり、罪悪感から日に日にちゃんと見れなくなる母親の顔。そんな自分に戸惑い、失望する日々を観たテレビに映る沖縄の海。「ウソもんみたい・・・」そんなささくれた気持ちで一人飛び乗った、大阪南港発一石垣島行きのフェリー飛龍。それが沖縄と私との出会いでした。

チャッピーは近所の家で産まれた子犬5匹のうちの一匹でした。当時4歳だった私と姉は、毎日、保育園から帰るとその子犬のいる家にまっしぐら。そして5匹いた子犬達も一匹、2匹と減っていき、とうとう残るのはあと2匹。姉と私はもう死に物狂いで母に取りすがりました。そして、忘れもしません、ピンクのバスタオルに小さなチャッピーをしっかりとくるみ、姉と二人歩いた幸せな幸せな、家へと続く道。こうしてチャッピーは我が家の一員となったのです。

正直チャッピーはどちらかというと手のかかる犬ではありませんでした。小さいくせに気は大きく、けんかはするし、脱走もする。気が立ってれば家族も咬むし、それでも私たちはチャッピーの事が大好きでした。

当たり前ですが、動物は皆私たちと同じように、モノを食べ、喜び、怒り、寂しがり、うんちをし、おしっこもします。時には飼い主にあてつけの様な嫌がらせもします。たまごっちのようなゲームのように決してバーチャルなものではなく、かわいいだけの存在でもありません。でも、だからこそ、動物と暮らすということは、毎日の散歩のような時にはめんどくさい事もふくめて、実感としての喜びに変わっていくのだと思います。同じふとんでチャッピーの鼻息、体温を感じながら一緒に眠る事の喜び、学校でいじめられて帰った時に泣きじゃくる私の側にあった、体温のある幸せ。そしてチャッピーは、きれい好きでもありました。そんなチャッピーをシャンプーし、ブローするのは昔から私の役目でした。チャッピーの得意そうな顔を見るのが嬉しくて、私は将来、トリマーの仕事に就こうと専門学校に入ったのですが、私は、その時毎日のように実習のためどこからか来る、たくさんの犬達の入ったゲージの前で涙が止まらなくなっていました。

フェリーに乗り時間がたつにつれ、私の中の不安な思いは不思議に薄らいでいきました。真夜中、陸もなにもない、真っ暗な海のと真ん中、船の降板に寝転びながら見上げた信じられない程の星空、そして南に近づいていくにつれて、次第に変わる風、海の色、そして何よりテレビで観たものなんかよりも何倍も何十倍も美しい海。この瞬間から私はもう沖縄の虜になっていました。奈良では想像した事もない、空気感、開放感、太陽は沖縄だけを見てるんじゃないかと思うようなまっすぐに降り注いでくる強い光、原色絵の具で描いたような主張し合う花々、筋肉隆々なまるでレスラーのような木々、私の目に初めて映る沖縄はあまりにもまぶしく、力強く、そして生命力にあふれていました。そんな惜しげもなく100%の力を出し切って生命がキラキラしてるものを前に、私はあっさりと退学を決意しました。そしてそれからの私はバイトの鬼と化し、毎月1回のペ

ースで沖縄へ。そんな中、沖縄に芸大があるということを知るやいなや、もう無我夢中で絵を描き、受験勉強を始めました。そしてチャッピーはそれを見とどけるかのように合格発表の一週間後に私たち家族の腕の中、静かに息をひきとりました。チャッピーは私にとって本当に兄のような存在でした。そして私たち家族にとってもチャッピーと暮らした16年間は、種は違えど、私たちは同じ生きもの、かけがえのない存在なんだと理解するには十分な時間でした。



一ちよっとひといきの前田一

2010.1

そして今、私は、土という素材をもちいて、生きもの、動物表現を始めています。“土”とはなんだか不思議です。土をさわっていると時々、まるで生きものの一部に触れているような錯覚を覚えることがあります。まるで象の鼻のような、まるで猫の舌のような、そして時には肉球やイルカのヒフのように。そしてそのような感覚がそうさせるのか、それが陶芸のちからなのかは分かりませんが、私はその土で作品をつくっているとき、まるですぐ側になにかがいてるかのようなあったかさを感じたり、ほんとに子供のような気持ちになったりします。そして土はやはり生きものと同じで、素直かと思えば、融通の利かない面もいっぱいあり、最後の段階、窯の中からうまれてくる瞬間までいつも気が気じゃありません。そして、窯の焼成にしても毎回同じ条件では焚けませんので、最後は火の持つ力に作品を託すしかないのですが、そんな中でも、時々この作品には明らかな意思があると思えない！ような、表情、雰囲気をもった作品がうまれてくることがあります。そういう時は陶芸の神様+動物の神様にW感謝しときます。そんな風にながら、チャッピーと過ごした16年のように時には牙をむかれながら、“やきもの”とも少しづつ理解を深め合い、一つでも、見てるだけで誰かを元気にできるような生命力の沸いてくる、そんな作品をうみ出せたらサイコーだろうなあ！そんな風に感じます。

(まえだ あや/陶作家)

～ツギハギブギウギ～

宮里志織

私はどんくさい。何をするにもスムーズにいったためしがない。リボン結びもうまくできないし、裁縫の玉結びを短く止めることがなかなかできず、途方に暮れる。出来ることより出来ないことのほうが圧倒的に多い私だが、何かものづくりをしたいと漠然と思っていた。だがどんくさいゆえ、表現方法は限られる。絵画は真っ白い紙をまえにすると緊張する。写真はシャッターボタンを押すのがすきなだけ。こんな私に出来ることはあるだろうか考えたときにふと思ひ浮かんだ。「陶芸なら出来るかもしれない。」と。陶芸を志し、携わっている人々からしてみれば失礼きわまりない。いわば消去法ともいえる軽い動機で、しかしかすかな希望を胸に私の陶芸に、土に関わる生活はスタートした。大学に入ったからといってどんくさが直るはずもなく、ますます磨きがかかり、うまくこなせない自分に嫌気がさし、ものづくりに携わっていてもいいのだろうか考えたこともあったが、不思議と土は嫌いにならなかった。むしろ好きになる一方。触感、色、におい、土に触っているとそれだけで心落ち着き幸せだった。ざらざら、ぬるぬる、ぴたぴた、課題ごとに土がかわるたびに手触りを楽しんでいた。

小さな頃から触るのは好きでお気に入りのタオルケットを寝るとき以外も常になでていた。通学路に落ちていた石ころを拾ってはポケットにいれ触りながら登校。砂浜では飽きもせず何回も何回も砂を掬い集めてはこぼし、両手からこぼれ落ちる砂の感触を楽しむ。小さな頃の触感に対する興味の延長線上に土があるのかもしれない。土に対する興味が湧いてきた。ある日土を触っていて床に落とした。拾い上げた土には床のゴツゴツとした質感が転写されており、落とす前とは明らかに表情が違っていた。いつもの大学、いつもの教室、見慣れた景色がいつもと違って見えた。それから土を片手に彷徨う日々が始まった。面白そうな触感をみつけては土を押しつけ表情を転写すると、平らな面に浮かび上がる様々な質感。この行為に私は夢中になった。様々なサンプルを前に何か出来ないかと考えていた時にサンプルを切り刻み、つぎはぎしていく行程を経たら新たな形がたち現れて夢中になった。AとBをたすとCという隙間が生まれ、Cを埋めるとDとE という新たな隙間がどんどんできて連想ゲームのように次から次へと1+1=2ではない世界がそこにはあった。

つぎはぎしていると「ここも埋めて！ここにもあるよ！」といった声が多方面から聞こえてきて、決まった形として終わらせないと延々とつぎはぎしてしまいそうになる。自分がつぎはぎしていると、つぎはぎなものに興味湧いてくる。ある日、散歩をしていると限られた資材で建てられた水平、直線を見つめた建物と出会った。様々な色に塗られ目がチカチカする外壁、素材の違う建材資材たちのコラボレーション。今にも崩れそうでいて崩れない、アンバランスなバランス感覚でその建築物はたっていた。不協和音のハーモニー。この建物に人はすんでいるのだろうかとしばらく眺めていたら真っ赤な扉があき、ひょっこり人が出てきたときはおとぎ話の世界に迷い込んだ錯覚におちいった、と同時に嬉しい気持ちになった。何回も通っているはずの通りなのに今まで気づかなかった。



－制作中の宮里－

2010.1

視点を変えてみると世の中つぎはぎにあふれていた。建築現場をおおうトタンの板、歩道のタイル、ダンボールの層、ビルの外壁。日本の継ぎ接ぎにも関心が出てきた。以前は貧乏くさいイメージだったが、もとになる衣服に違う衣服を合わせることでより魅力的に映る。こちらのアンテナをあわずだけで世界はとて豊かだった。自分は今後どういった道を歩いていくのかわからないが自分の心に耳を傾け、外の世界にアンテナを張り、そのときの素直な気持ちが反映されたらと思う。小さなヒントはつぎはぎのように日々の生活の中にあると思う。

(みやざと しおり／陶作家)

～土と火と私～

紺野 乃英子

先日、人様の窯出し窯開きに行ってきた。とても盛況な上、きれいに焼きそろえられた器が並べられていた。にぎやかな雑談から聞こえてくる好評、知り合いが話しかけてくる 彼らはセンスがあるね、と。ハイ、とてもきれいに焼けていますねと返事。なんだか違和感、不安とも何とも判別のつかない感情で私は小さくなっていった。私はそこにはいかないという何か世間（こんな大きなくりにまとめていいのかわからないが）との隔たり、ギャップのようなしこりがいつごろからか自分の中にあるような気がする。彼らのものはとてもきれいであった。はたまたすばらしい商品でもあった。

突如として解放宣言をした。知る人は少ないが昨年の10月だった。文字通りつまらない束縛からの脱却を目指したものだが、だいたいの束縛が自分でつくり上げたものだからたちが悪い。いつの間にかこんな柵までこしらえていたのかと愉快になる。しこりぐらい誰でも持っているかもと考える。楽しいじゃあないか。きれいとかよごれがあるとか、使えるとか使えないとか、重いか軽いか、割れている、ヒビがある、ゆがんでいる、穴があいている、そんなことナゾ気にならないモノでいたい。とりわけ土には土らしくあって、土より土らしく、土たらしめる姿であってほしいと。自分の作品に懇願する。だからこそ赤土が金属的なそのままの表情をもって窯から生まれたときには愕然と立ち尽くすようなことが度々。土中の金属をどう使いこなしていくか、自然の力を遺憾なく発揮できるようにと黒子のように立ち回り、もっと自然と仲良くなりたいものと切々に願ふ。のびのびと雑草のような気分で土に向かいたいものだと。願うは願うのだけれど、そこから脱線してガタガタと音を立てているもまた事実。人の道理でしぜん作為のない器に魅了される。大量生産の実用品だから ただひたすらに作られた無心さ、理屈のなさゆえの親しみやすさに。ひょうきんにすっとぼけたようなナリをして、そこにいることの可愛らしさ。憎めない奴。年を重ねいい風合いに仕上がったおじやおばのような、多くを語らずタダなんくるないさーという。もしくは表情豊かで健康優良なわらば一二重丸。青年期のような作品がいちばんいただけない。色にしてもまた然りと云う。しかし人間たるもの青年期が一番ながい。ご愁傷様。人事のような物言いが、

まさしく真ただ中にいると思ふ。ギャーギャーワーワー言うてしまうのだ。余計なことまで言ってしまったと家に帰り反省したりもするのだけど、つとめて口をつぐむのはストレスフルだ。言いたけ言ってしまえばすっきりして、また次の思考もでてくるというものだろうと。窯焚きにおいてはことさらに、素直に言い分を聞いてあげられない。なんでもないことまで自分でややこしくしてしまうのだ。まさに反抗期のそれと似て思いと行動と結果がともなわずモヤモヤモヤ。



一窯の前に立つ紺野一

2010.1

今回のものはとりわけて有田への思いが強い。昨年の5月に有田・唐津へ行った。二度目の訪問だったがけっこうな刺激を受けた。世界一の検品、少しのひずみもぶれも許されない様子。自分の仕事との見事なまでの違いにととてもわくわくした。“可憐な”という言葉もキーワードのように頭に残った。やってみたい。“可憐な”土の焼きを。土臭さは残したままに。ランランと鼻歌交じりで制作を始めたのはいいが今回、窯が万全でない。作品を作るのも窯を焚くのも私だけど、最終的にどこまで“可憐”で“土臭く”なるのかは分からない。イメージはあっても“可憐な”土臭さを付随させてくれるのは窯だからだ。その焼成を行う窯が万全でないことの頼りのなさ、無常感、どうしようもなさといったらない。相棒不在の喪失感は一ひとしおで、なんとも切ない。当たり前だが、焼き物は焼いてこそ成立する。焼かなければただの土。土を焼き物にするのは火と私。窯こそいつでも万事整えておくことが大切で火を扱う者の責務でもあると肝に命じた。ああ窯さまさま。

(この のぶこ／陶作家)

～ラインを求めて～

上原由布

小学校1、2年生のことだったろうか。雨上がりの学校の帰り道、植え付けまへのサトウキビ畑が大きな泥畑になっていた。友達と二人、持っていた傘の先でその土をつつくと、どこまでも沈んでいく柔らかい感触が面白くなって、終いには靴を履いたまま泥畑に飛び込んだ。ズンズンと勢いよく前へ進んだのもつかの間、何か得体の知れない生き物に飲み込まれそうな強さで足を捕らわれた。急に怖くなって、やっとの思いで抜け出せた時には、友達と二人泣きながら帰った記憶がある。今思い起こせば、このときが土との出会いとでもいえるのかもしれない。

土との最初の出会いは柔らかくて面白く、飲み込まれそうに怖かったのだ。そんな土を今、私は工房で練っている。ざらざら、ネトネト、パサパサ、ぷるぷる、ごつごつ、もちもち、サクサク、つるつる。手に伝わってくる土の感触は様々だ。そんな感触が、ふとある情景を思い起こさせる。それは学生時代に訪れた美術館。八重山のパナリの壺が展示されていた。17～18世紀に作られたというその壺は、まるでぷうーと紙風船を膨らませたような、なんとも愛らしい丸々とした形だった。その壺がつくられた時代のことを知ることのない私は、壺のおおらかな形に、なま温かい空気を感じたような気がした。

初めはひらぺったい紙風船も、勢いよく息を吹き込むと、形が一つのふくらみとなって現われてくる。もともとはなにもないのに内側から外部へと生まれてくる空（くう）という力。その力が、この内側から放つものってなんだろうか。そんな思いが沸いてくる。

日々の生活の中で、ついつい引き寄せられるものがある。例えば通り雨の後、葉の上に落ちた、内から弾くように膨らんだ大小のしずく。羽毛に包まれた野鳥のむね。漂流して丸くなった流木や、うずを巻いた貝殻。ぼてっとした木の実がいつの間にか手元に集まってくる。一つ一つじっと観察してみると、直線に近い曲線や曲線に近い直線、一定の放物線を描きながら、物質のもつ線の領域をゆったりと行き来しているかのように美しい。つかみたい線。近づきたい線。そのたびに線を意識してしまう。

とある知り合いのお宅でイギリスの古い瓦を拝見する機会があった。なんの装飾も施されていな

い、一見すると普通の赤瓦。両手で持つとずしつと重い。眼を凝らしてみると、一枚一枚少しずつ湾曲していて、褐色をおび、無数に苔染みだの痕があった。普段、刺身や焼き魚を盛ったりして使っているという瓦は、私の手の中で自然な艶を放っていた。何千枚、何万枚と作られたであろうその瓦からは、太陽や月の光、そして風雨を受け、只々時間の痕跡を感じるだけだ。確かな形でありながら、曖昧なもの。それはほんの少し残り香に近い感覚かもしれない。



－工房で制作中の上原－

2010.2

太古の昔から、食物や水を受けるための道具として、時には神事の際に意味あるものとして用いられてきた器たち。自然の物質と同じように、器たちも、又周りを取り囲む生活の中で、器たちが器自身としての役目を果たし、ゆっくりと人の眼には見えない速度で彼らは変化していくのだろう。

圧しても伸ばしてもちぎっても、土は答えてくれる。しかしまた、とどめようとしてもとどまらない土は、自在であって難しい。手法は色々があるが、轆轤や手びねりの場合、一点の軸から始まり、回転しながら指先の点から点へと伝わって形となっていく。その道筋のなかで様々なラインが生まれては消え、生まれては消えていく。あと少し、あともう少し。つかみたい線。近づきたい線。とどめていたい線。時々自分が美しいと感じるラインを求めて、今現在、私はやきものという仕事を通して、なんとかその瑞々しい土の一瞬一瞬をとどめたいと思っている。

(うへはら ゆう／陶作家)

## 新世代の陶作家展によせて

今日のITが発達したデジタル化社会において、陶芸の若手作家は、人々とどのように向き合っているのか、向き合おうとしているのか。陶芸専門の画廊ならずとも興味深い。今回の企画展＜新世代の陶展＞は、そのムーブメントと時代感覚を知る手がかりになればと企画した。専門の大学や大学院を卒業して数年。それぞれの作家は制作の手を止めず、独自の方法展開と新たな発見を試みている。

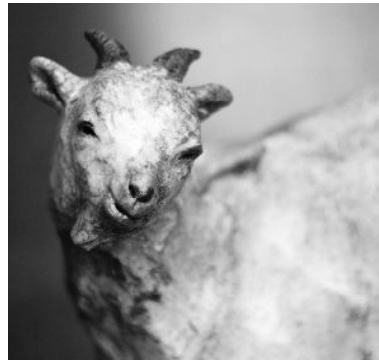
現代の陶芸という分野は、「職人」あるいは「工人」と呼称されてきた前近代の専門の作り手、分業化や徒弟制度がもたらした伝統の技術と、様式を前提に伝達され、近代化の中で美術の潮流に影響されながら発展したものと理解している。今日においては、「工芸」のカテゴリーの定義はその根底から揺さぶられ、工芸（クラフト）と美術（ファインアート）がクロスし、その境界も曖昧になり、現代陶芸を多岐に渡る様々な展開へ導いているように思える。

今回の若手作家たちは旧来の一般通念の制度や様式の呪縛から放たれるように、それぞれの時代感覚で自在に制作している。気負いの無い軽やかな越境と挑戦と言えようか。土と戯れ、釉薬と会話し窯炎と格闘する。経験の浅さは様々な現実の事象に翻弄され試行錯誤の連続である。しかし、予想外の難所は若さで乗り越え、その中に大きな可能性の芽を発見しているようだ。



育まれた生活環境と日常に視線をそそぎ、愛おしい動物たちの生命を「土」でよみがえらせ、独特の陶オブジェの世界を展開する前田彩。人々が生活する空間に絵画や立体のコラージュの魅力を見だし、たたら技法で野性的で力強い作品展開をしている宮里志織。外来の土を使わず、やんばるの土と火が生み出すエロスの漂う陶皮と陶質。その神秘に引き寄せられ、枠におさまらないモノを作ると解放宣言した紺野乃美子。しごく当たり前の器、しかし自分らしい器、幾人もの作り手によって追求された器、それでも頑固にこだわり、現在進行形でありたいとする上原由布。

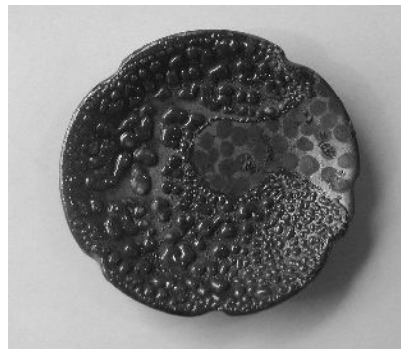
20代のまだ手あかの付いてない作家たち。時代の空気を素直に吸い込んだ伸びやかな感性の作品が期待される。本リレー個展を機会にこの新世代の作家たちが、ビジョンをひろげ、サバイバルな作家生活を持続し、近い将来に感動を与える作品が見られることを期待したい。  
(画廊主/上原誠勇)



「ヤギ」 前田彩 2010



「酔いどれツギー飲んだくれハギー」 宮里志織 2010



「オさら」 紺野乃美子 2010



「壺」 上原由布 2010

---

## ■前田彩 (Maeda Aya)

### <略歴>

- 1981 奈良県天理市生まれ  
2006 沖縄県立芸術大学美術工芸学部陶芸科卒業  
2007 沖縄県立芸術大学美術工芸学部陶磁器研究科卒業  
那覇市陶芸教室VIVACEにて制作活動開始

### <個展>

- 2006 「Aya Maeda Exhibition」/gregor (那覇市ギャラリー)  
2009 「前田彩作陶展」/パレットりうぼう美術サロン  
2010 新世代の陶「前田彩展」=おしゃべりな土  
=画廊沖縄

### <グループ展>

- 2008 アリカワコウヘイプレゼンツ  
「Art a la mode」/グローバルギャラリー  
2009 「沖縄クリエーション展」/大阪梅田阪急デパート  
「土とガラス 沖縄～青森7人の作家展」/  
長野かんでんばばホール  
「日仏造芸美術フェスティバル」/県民ギャラリー  
2010 TOUGEI OKINAWA 10-30 陶芸展/県民ギャラリー

---

## ■宮里志織 (Miyazato Shiori)

### <略歴>

- 1982 沖縄県那覇市生まれ。  
2006 沖縄県立芸術大学工芸専攻陶芸コース卒業  
同大学大学院造形芸術科生活造形専攻陶磁器専修  
2009 大学院修了  
2010 糸満工芸陶苑に勤務(現在)

### <個展>

- 2010 新世代の陶「宮里志織展」=ツギハギブギウギ=画廊沖縄

### <グループ展>

- 2005 「みなも」/カフェ・hal (沖縄)  
2008 「彫刻の五・七・五展」/沖縄県立芸術大学芸術資料館 (沖縄)  
2008 「泥土会展」/リウボウ美術サロン (沖縄)  
2009 「泥土会展」/リウボウ美術サロン (沖縄)

---

## ■紺野乃芙子 (Konno Nobuko)

### <略歴>

- 1983 大阪府堺市生まれ  
2006 沖縄県立芸術大学工芸専攻陶芸コース卒業  
「土の實ファーム」の築窯に参加  
2007 同校研究生修了、名護市旭川「土の實ファーム」窯業所に入所

### <個展>

- 2010 新世代の陶「紺野乃芙子展」=土と火と私=画廊沖縄

### <グループ展>

- 2004 KYO-RYU ART PROJECT/那覇市  
2009 「沖縄クリエーション展」/阪急梅田本店 (大阪)

---

## ■上原由布 (Uehara Yu)

### <略歴>

- 1983 沖縄県南風原町生まれ  
2006 沖縄県立芸術大学陶芸コース卒業  
2008 京都市伝統産業技術者研修陶磁器コース専修科修了、同年、沖縄に工房を構える

### <個展>

- 2010 新世代の陶「上原由布展」=ライン=画廊沖縄

### <グループ展>

- 2005 「みなも」/カフェ・hal (沖縄)  
「夏のうつわ展」/うつわ菜の花 (神奈川)  
2008 「陶展」/second house (京都)  
2009 「沖縄クリエーション展」/阪急梅田本店 (大阪)